

大切な人の遺骨 真珠やダイヤに

「手元供養」が静かなブームに

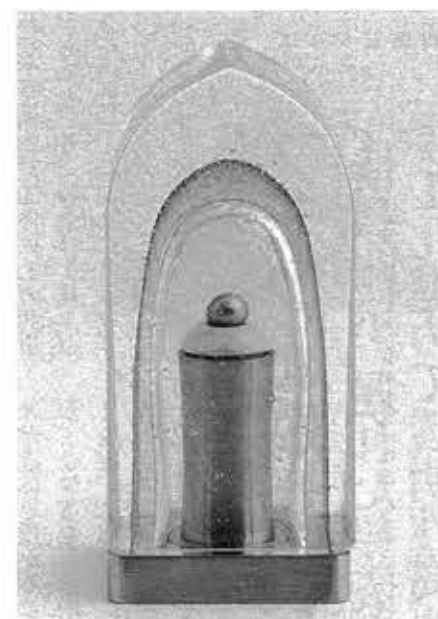
先祖代々の墓を持つ意識が薄れる中、身近な人が亡くなった喪失感を埋めるため、遺骨や遺灰をそばに置いて供養する人が増えている。

吸い込まれそうな輝きをまとった真珠。実はこれ、遺骨でつくった真珠真珠だ。

「核となる玉の素材が違うだけで、一般の真珠真珠と同じ過程で形成されます」

と、日本初となる遺骨真珠を考案したアッシュン（名古屋市中）社長の中田英樹さんは言う。

同社は、真珠の養殖が盛んな三重県志摩市の英虞湾などの沖



いのりのしんじゅ
手元墓（9万5千円）に納められた「いのりのしんじゅ」。価格は25万円で、年100件の注文を目指している

合で海洋散骨を手掛けている。そもそも養殖真珠は、貝から作った「核」を「母貝」となるアコヤガイなどの貝に入れ、湾内の養殖いかだで育てると美しい光沢をもつ真珠層ができる。あるとき、田中さんは「核」を遺骨で作れば、真珠ができるのではとひらめいた。

しかし材料となる遺骨がない。そこで保管していた自分の亡き

父の遺骨を使うことにした。核を丸くするなど技術面で試行錯誤を繰り返して、1年近くかけ商品化にこぎつけた。完成した真珠は「いのりのしんじゅ」と命名し、6月から販売を開始した。

必要な遺骨は30グラム程度。それを砕いて粘土に混ぜ直径7ミリほどの核を90個近く作り、5月から6月にかけて母貝に入れる。そして、志摩の海で半年近くかけ養殖すると、核を取り巻く真珠層が形成される。きれいな真珠になるのは1割程度だ。しかも、自然の産物である真珠の色や形は、母貝や水温といった自然条件や、骨によって異なってくるという。

「変形した真珠も、受けとめて手元に置いて供養していただきたい」（田中さん）

故人の遺骨や遺灰をそばに置いて供養することは、古くから行われてきた。それが「手元供養」として広く知られるようになったのは2000年ごろ。今では癒やしの一つの形として定着しつつある。

葬祭業界大手のメモリアルアートの大野屋（東京都）では、05年から手元供養の関連商品を展開。10年からは「ソウルジュエリーシリーズ」としてブランド展開を開始している。販売は好調で、10年以降の販売個数は前年比2ケタの伸び率だ。

手元供養が静かなブームになっている背景を、同社広報室の上原ひろさんはこう見る。

「核家族が当たり前になり先祖供養に対する考えが薄れる中、身近な人が亡くなった寂しさや喪失感を埋めてくれるものが求められ、そばに置いて自分の気持ちに寄り添う手元供養を選ぶ人が増えていると思います」

同社はペンダント類やミニ骨壺など300アイテム近くを扱う。一番人気は2万円の「オーブンハート」のシルバーネックレスで、ペンダントトップの裏側を付属品の専用ネジで開閉して遺灰を納められるようになっている。

同社では、お墓の販売、葬式仏壇を3本柱に据え事業展開を行っているが、手元供養を4本



ソウルジュエリーシリーズ
メモリアルアートの「ソウルジュエリーシリーズ」。左から、ブレスレット（2万9800円）、リング（2万3千円）、ネックレス（2万円）

目の柱にするべく力を入れていくという。

遺影より故人が身近に

5兆円ともいわれるエンディング産業。ただ、手元供養はまだ新興のニッチな産業のため市場規模などの統計はない。だが、人生を終えることへの関心の高まりなどで、今後も市場は拡大していくという見方は強い。それにあわせ、異業種から新規参入する会社も増えてきた。故人をフィギュアに――。

大阪市にある「ロイスエンタテインメント」が手掛けるのは、「遺影」ならぬ「遺人形」だ。

「3Dプリンターを使って、亡くなった家族の生前の姿を小さな人形にするサービスです」

と、同社社長の古荘光一さん。本業は、3Dフィギュア製作会社だ。それが手元供養に参入したきっかけは2年前。交通事故で娘（当時11）を亡くした父親からの依頼だった。

「娘の写真で、フィギュアを作ってくれませんか」

人間は表情が細かいので技術的に難しく一度は断ったが、父親の強い思いを感じ引き受けた。1枚の写真から3Dデータを起こし、微調整を繰り返し特殊な石膏を固めて着色、4カ月近くかけて作った。完成した30センチほどのフィギュアと対面した父親は号泣した。

「ああ、娘や。帰ってきた」
父親の姿を見て古荘さんは、今後必要とする人の依頼は受けようと思った。



遺人形
「遺人形」の価格は高さ20センチで10万円から。納期は約2カ月で、この1年で約100体を受注

実際、遺人形を手にとると、リアルな仕上がりで遺影よりも故人を身近に感じられそうだと、

遺骨300グラム必要

こうして昨年7月、「遺人形」としてホームページで公開すると、子どもを亡くした親などから依頼が来るように。同社は4月から、遺灰を専用ケースに入れ、フィギュアに埋め込むサービスにも着手した。

「いずれは、故人の音声も組み込み会話もできるようにしたい」と思っています（古荘さん）。サービスの多様化が進むのも、手元供養の特徴だ。

スイスに本社のあるアルゴダンザ社が手掛けるのは、なんと遺骨ダイヤモンド。

「遺骨から人工ダイヤモンドを作り、アクセサリに加工するサービスです」

と、日本支社のアルゴダンザ・ジャパン（静岡市）社長の法月雅喜さん。ダイヤは「メモリアル・ダイヤモンド」と呼ばれ、05年に国内でのサービスを開始すると、注文は右肩上がり。現在は年200件近い依頼がある。

この遺骨ダイヤ、作るのに遺骨は300グラム程度必要。まず遺骨をスイスの本社に送った後、特殊技術で不純物の多い遺骨からダイヤの成分となる炭素だけを抽出。その後、高温・高圧の条件で加工、数週間後には無色透明から深みのある青い人工ダイヤモンドとなる。

「依頼者の9割は女性。若くして家族を亡くした人からの注文が多くあります」（法月さん）。ここまで重い方が多様化している背景には、遺骨の保管方法に対する考え方の変化がある。

都市部を中心に「遺骨は墓地に納めるもの」という常識そのものが、変わりつつあるのだ。

宗教は関係ない供養

埼玉県川口市に暮らす山本正人さん（64）は、2月に95歳で亡くなった父親のために、自宅の床の間に置く「墓」を購入した。「山本家の墓」があるのは山口県の下関市に浮かぶ島。墓参

ご供養家具

「ご供養家具」は幅65センチ、奥行き40センチ、高さ80センチのものなど、4タイプ。価格は24万2千～59万8千円で、2010年に発売を開始して以来、月10台近く売れている



photo アルゴダンザ・ジャパン提供（左中）

りといっても帰るのが大変です」

「時代は変わったと思います」

「ご供養家具を考案したのは、トータルリビング ユウキ（横浜市）。オーダー家具の生産・販売を手掛けるが、8年ほど前に高齢の顧客の一人から「自分が亡くなった時に手元に置けるお墓ができないか」と相談されたのがきっかけだった。

コンセプトは、「家の中に置けるお墓」。家の中に墓を置くのは法的にも問題はない。宗教は関係なく、キリスト教や無宗教の人も買い求めていくとか。

同社社長の小原御郎さんは、手元供養についてこう話す。「亡くなった方の供養のあり方に、タブーがなくなっていると感じます」

これからの多死社会を迎え、次はどんな手元供養のサービスが生まれるか。編集 野村昌二

メモリアル・ダイヤモンド

「メモリアル・ダイヤモンド」の製作期間は半年が目安。大きさは0.2～1カラットで、料金は48万～253万円

「ご供養家具」の製作期間は半年が目安。大きさは0.2～1カラットで、料金は48万～253万円